日本医史学雑誌　第58巻第3号（2012）　389–392

適塾記念会 緒方洪庵全集編集委員会 編
『緒方洪庵全集』第一巻・第二巻
（『扶氏経験遺訓』上・下）
――刊行に寄せて――

浅井　允晶

奈良市

Ⅰ

大阪大学の適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会は，2010年（平成22）11月24日付けで『緒方洪庵全集』（以下，『全集』と略す）第一巻，第二巻を大阪大学出版会から刊行した．第一巻，第二巻は緒方洪庵編訳による『扶氏経験遺訓』（以下，『遺訓』と略す）全30巻を翻刻，上下二巻に分冊して収録している．

『遺訓』は洪庵の主要な業績の一つとして知られるが，これまで史料としてその全容が翻刻される機会には恵まれなかった．一つにはそれが大部であることや，また一つには，きわめて専門性の高い内容であることなどによるのであろう．したがって，このたび『遺訓』の翻刻が実現したことは，緒方洪庵に関わる医史学や薬学史，洋学史，科学史，文化史など多岐にわたる領域の研究にとって，待望の書の登場といってよい．

時に，2010年（平成22）は「緒方洪庵生誕200年」に相当する．それだけに，『全集』の発刊は，適塾記念会の緒方洪庵「生誕200年記念」事業にふさわしいものとなっている．

適塾記念会によれば，この『全集』は全五巻で完結するかたちをとり，第三巻以降には『病学通論』や『虎狼痢治準』，次いで洪庵の書状や日記，和歌，さらには適塾『姓名録』に至る洪庵関係の史料のすべてを翻刻，収録し，順次刊行する予定という．もとより，収録予定の洪庵の日記や和歌，適塾『姓名録』については，すでに緒方富雄『緒方洪庵伝』第二版増補版（岩波書店）に翻刻されている．また，洪庵の書状のほとんどについても，緒方富雄・適塾記念会編『緒方洪庵のてがみ』その一～その二（菜根出版），あるいは緒方富雄・梅溪昇・適塾記念会編『緒方洪庵のてがみ』その三～その五（菜根出版）とに翻刻，収録されてきている．このたびの『全集』発刊の企画は，それらを含め，洪庵に関する史料をすべて網羅し，決定版を刊行しようとする意図を持つだけに，適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会の『全集』刊行に対するなみなみならぬ意気込みがうかがえよう．

Ⅱ

さて，適塾記念会は，大阪大学を主要な受け皿として1952年（昭和27）に誕生した組織である．幕末の1862年（文久2）緒方洪庵が幕府に召されて大阪を離れたのち，適塾での教育は洪庵の名代となった養子の拙斎，あるいは洪庵の嗣子惟準により従来の屋舎で明治の中葉まで継続されていた．次いで，この屋舎は緒方家の住宅として用いられ，また華陽堂病院へも一時期貸与されるに至っている．しかし，1940年（昭和15）この建物を大阪府が史跡に指定し，翌年には文部省が「史跡・緒方洪庵旧宅及塾」として指定したことを契機に，緒方家は，これを保存継承の見地から大阪帝国大学（現，大阪大学）に寄付するに至った．大阪帝国大学医学部が適塾の流れをくむとい

う観点に根ざしたものである．

その後，第二次世界大戦においても戦災をまぬがれた適塾の屋舎を活用しつつ，戦後復興の息吹きのなかで1952年（昭和27），大阪大学を主体に幅広い有識者の協力を得て適塾記念会が発足した．その目的は，文化財としての適塾の建物の保存・管理にとどまらず，「緒方洪庵及び適塾関係者の業績を顕彰するとともに，我が国近代学術の発達を解明し，文化の向上に資すること」（「適塾記念会会則」）にあり，緒方洪庵や適塾に関わる伝統や精神の継承・発展をはかる方向で種々の事業を展開してきた．創設以来，機関誌『適塾』を刊行し，また「緒方洪庵生誕150年記念事業」の一環として着手した適塾門下生調査に根ざして，1968年（昭和43）および1973年（昭和48）に『適塾門下生調査資料』第Ⅰ集，第2集を刊行してきたのは，その具体化の現われである．この適塾門下生についての調査活動は，以後適塾記念会の中核を担った芝哲夫氏を中心に引き継がれ，その成果が『適塾』誌上を飾ってきたことは周知のとおりである．

やがて，適塾の建物が解体復元工事によって新たに甦り，その周辺の史跡公園化の整備も進んだ1980年（昭和55）には，これを記念して『緒方洪庵と適塾』の図録が刊行され，また前述の『緒方洪庵のてがみ』その一，その二の刊行もはじまった．2002年（平成14）には，「適塾記念会創立50周年記念　適塾の所蔵品特別展」開催に伴い，『適塾アーカイブ――貴重資料52選――』が代表的な関係資料収録の図録として適塾記念会から発刊されている．ただ，その間，記念会の創設に尽力した先達，藤野恒三郎氏をして「自らの夢」，「記念会の夢」といわしめた『緒方洪庵全集』の発刊は，未だ「夢」にすぎず，重い課題のままとなっていた．

ところが，こうした流れの中で，『緒方洪庵全集』出版を企画する機運は，この頃関係者の間で次第に醸成されてくる．その方向を具体化させる口火をきったのは適塾記念会理事であり，緒方富雄氏の跡を継いで『緒方洪庵のてがみ』全五巻を完結させた梅溪昇氏であった．2004年（平成16）の『適塾』第37号の「巻頭言」で，『緒方洪庵全集』の刊行は「過去半世紀の歴史をもつ記念会の年来の宿題ないし宿望である」として，その刊行事業の発足を提言されたのがそれである．次いで，芝哲夫氏が翌年の『適塾』の「巻頭言」で，やはりこれを2010年（平成22）の洪庵「生誕200年記念」事業として立ち上げることを提案され，徐々にこの企画は実現に向けて歩みはじめた．かくて，2006年（平成18）適塾記念会はこの『全集』の刊行を決定，出版実現に向けての実施計画を進めるに至ったのである．2010年，適塾記念会の「緒方洪庵生誕200年」記念事業の一環として『緒方洪庵全集』第一巻，第二巻が世に出たことは，こうした経緯にもとづいていた．

Ⅲ

『全集』の第一巻，第二巻に収録された『遺訓』全30巻は，『病学通論』や『虎狼痢治準』と共に洪庵の主要な学問的業績として知られている．これはドイツ，ベルリン大学の内科学教授であったフーフェランドC. W. Hufelandの内科書Enchiridion medicum, oder Anleitung zur medizinischen Praxis（医学必携，臨床入門）の第2版（1836年版）の洪庵による重訳である．すなわち，フーフェランドの書をオランダのハーヘマン H. H. Hageman, Jrがオランダ語に訳したEnchiridion medicum, Handleiding tot de Geneeskunde Praktijk（医学必携，臨床医学の手引き，1838年版）を洪庵が和訳した成果であった．このオランダ語版は出版後まもなくわが国に伝えられ，フーフェランドの名も知られていたが，殊の外本書に傾倒したのが洪庵であったのである．その書に接した洪庵は，『遺訓』の「天保壬寅夏五月」（1842年＝天保13）付けの「凡例」に，

> 熟読数回ニシテ漸ク味ヒヲ生シ，愈々玩味スレハ愈々意味ノ深長ヲ覚エ，自ラ旧来ノ疑団氷釈セルヲ知ラス，殆ト侵食ヲ忘レタリ．之ヲ久フシテ以為ク此論説を以テ之レヲ同志ニ示サハ，其喜ヒ亦タ必ス余カ若クナラント．是ニ於テ自ラ固陋ヲ顧ミス，先ツ各病治法ノ編ヲ訳シテ之ヲ上梓シ，以テ四方ノ済世ニ頒ツ．

と記している．西洋医学の成果を盛り込んだフーフェランドの書物に対して洪庵がいかに感銘を受け，当時の医学界に流布させる必要性を痛感したかがうかがえる．ちなみに，洪庵が和訳した書名を『扶氏経験遺訓』としたのは，フーフェランドの書が50年におよぶ経験の集成であったことによる．

『遺訓』の刊本は，治療編の本編25巻と附録3巻，薬方編2巻，計30巻で構成されている．「目次」に沿って内容の概要を示すと，次のとおりとなる．

急性熱病，慢性熱病，炽衝病，僂麻質病，胃腸病，神経病，消削病，気水集積病（水腫病・気脹病），過泄病（失血病・脱液病），閉塞病，皮膚病，液質変性病，器質変性病，婦人病，小児病，附録（薬品之部・方術之部・病症之部），薬方編.

こうした構成は熱性疾患にはじまり諸病におよぶが，牛痘種痘法の普及に尽力したフーフェランドの書によるものだけに，「皮膚病」の項目の「総論，痘瘡，類痘，牛痘種法，変痘」などにも詳細を尽くすものがあり，これによってもその性格がうかがい知れよう．刊行後『遺訓』が高い評価を得ていたことも頷ける．ただし，「附録」3巻は原書の翻訳ではなく，本編中の方術や病名について「模斯篤（モスト）医家韻府」や「設留斯（セリウス）外科書」などの蘭書，あるいは宇田川玄真訳・榕庵校『和蘭薬鏡』などの既刊書から引用した内容を洪庵が注記し，まとめたものとなっている．

早い段階でこのオランダ語版に接した洪庵は，上記の「凡例」の日付けにも示されるように，すでに1842年（天保13）には治療編の翻訳をひとまず終えて出版を進める予定であったようであるが，実際出版されたのは1857年（安政4）の治療編の3巻と薬方編2巻が最初で，翌年発売されている．全30巻の出版が整ったのは1861年（文久元）のことであった．刊本各巻の冒頭には「足守 緒方 章 公裁，義弟 郁 子文，同訳」，「西肥 大庭 恣 景徳，参校」とあり，翻訳は洪庵と義弟の緒方郁蔵（研堂），大庭景徳（雪斎）が参校として加わっていた．郁蔵（研堂）や大庭景徳（雪斎）ら適塾関係者がどの段階から参加していたかについては諸説があり，必ずしも明らかでないが，注視すべき点であろう．江戸での出版には箕作秋坪が協力している．

ただ，その出版に寄せる洪庵の思いにも拘わらず，これに15年の歳月を要したのには当時の蘭書の翻訳出版に対する検定事情なども絡んでいた．このため，その間には，未定稿の写本も流布しており，またフーフェランドの書の抄訳を杉田成卿が『済生三方』3巻と『医戒』，青木浩斎が『察病亀鑑』3巻として出版している．これらの抄訳部分はフーフェランドの書の巻末と巻頭を飾るものであるが，洪庵の『遺訓』ではいずれも割愛されており，後日改めて附録として追加するつもりであったという．したがって，『遺訓』ではこの部分は欠落している．また，この点に関していえば，洪庵がフーフェランドの書の巻末にあるDe verpligtingen des geneesheers（医師の義務）の部分を採りあげて抄訳し，1857年（安政4）改めて「扶氏医戒之略」と題する医の倫理の大要12カ条に仕立て上げたことも名高い．洪庵にとっては『遺訓』の仕上げに充てたものといえようか．なお，『全集』におけるこの部分の扱いについては，別に改めて収録する由である．

Ⅳ

このように意義深い内容を有する『遺訓』だけに，これは『全集』第一巻，第二巻を飾るにふさわしいものであったが，その翻刻史料出版の推進は容易ではなかった．単に翻刻だけにとどまらず，註と索引，さらに解説の整備をはかり，充実した史料の完成を目指したからであったろう．そして，その役割は，長年適塾記念会で洪庵および適塾門下生についての調査活動を積極的に展開してきた芝哲夫氏に委ねられた．大阪大学附属図書館本を底本とすることにはじまる困難な仕事は足掛け5年におよび，その努力は並大抵のものではなかったと思われる．

私事にわたるが，財団法人・洪庵記念会の除痘館記念資料室専門委員会でご一緒させていただいていた関係からいえば，委員会開催の研究室に入ってくるや，氏の第一声は常に『扶氏経験遺訓』の翻刻事業に関わる内容であった．氏がいかにこの仕事に傾倒し，情熱を傾けていたかを感じさせられていた次第である．ただ，氏の傍らには長年手を携えて適塾記念会を推進し，除痘館記念資料室専門委員会でも席を並べてきた加藤四郎氏や米田該典氏，あるいはまた古西義麿氏などがおられ，協力しておられたことは幸いであった．殊に米田氏は註や解説の執筆にあたって助力され，翻刻の校閲を担当された橋本孝成氏らと共に芝氏を支えたことも記憶に新しい．

しかし，全力を傾注し，そのほとんどを一人で進めてきた芝氏は，2010年（平成22）春以降病床での生活を余儀なくされていた．それでもこの出版に心血を注いできた氏は，病床で校正刷りと向きあう日々を過ごし，校了後の同年9月28日に他界された．『全集』第一巻，第二巻に上下二巻として収録された『遺訓』は，その畢生の成果として実を結び，洪庵の「生誕200年記念」事業に彩りを添えたが，刊行物そのものはご臨終に間に合わなかったという．関係者にとっては無念のきわみであろう．

かくて，註と索引を整え，解説を付した『遺訓』の翻刻は『全集』第一巻，第二巻として世に出るに至り，長年にわたる適塾記念会の「夢」は実現した．そしてそれは研究史料として整備されるに至っただけに，多くの研究者にとっても念願の書の刊行となった．だが，これは飽くまでも『扶氏経験遺訓』に関する研究を本格的に進める第一歩にすぎない．

これまで『遺訓』をめぐる研究は，緒方富雄氏の「緒方洪庵『扶氏経験遺訓』の出版―その成立と経緯―」（『中外医事新報』1）以来，片桐一男氏の「江馬塾における『扶氏経験遺訓』の需要（下）」（『日本医史学雑誌』20-3）や村田忠一氏の「緒方洪庵『扶氏経験遺訓附録』とその引用蘭書」（『日蘭学会会報』24-1），あるいは中村昭氏の「緒方洪庵『扶氏経験遺訓』翻訳過程の検討」（『日本医史学雑誌』35-3）など，いくたの興味深い成果をあげてきた．『全集』第二巻の本書の解説「『扶氏経験遺訓』の原著者C.W.フーフェランド」で，翻訳時における洪庵の医学用「造語」の創出という観点を芝氏が強く提起されてきているのも，その一つである．

ところが，そうした『遺訓』についての研究は必ずしも満足できる域に至らず，むしろ多くは今後の課題となっている．その全容を翻刻した本書の刊行が実現しなかったことも一因となっていた．それだけに，このたびの本書の出版を通して，今後『遺訓』のみならず緒方洪庵に関わる諸相の研究が大きく進展することを期待してやまない．

なお，2011年（平成23）4月，大阪大学は創立80周年に合わせて従来の適塾記念会の組織を改め，この部門に「大阪学」と「オランダ学」の両部門を加えた「大阪大学適塾記念センター」を誕生させている．

［大阪大学出版会，〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7，TEL. 06（6877）1614，2010年11月，A5判，第一巻（上）426頁，第二巻（下）420頁，各巻共10,000円＋税］